

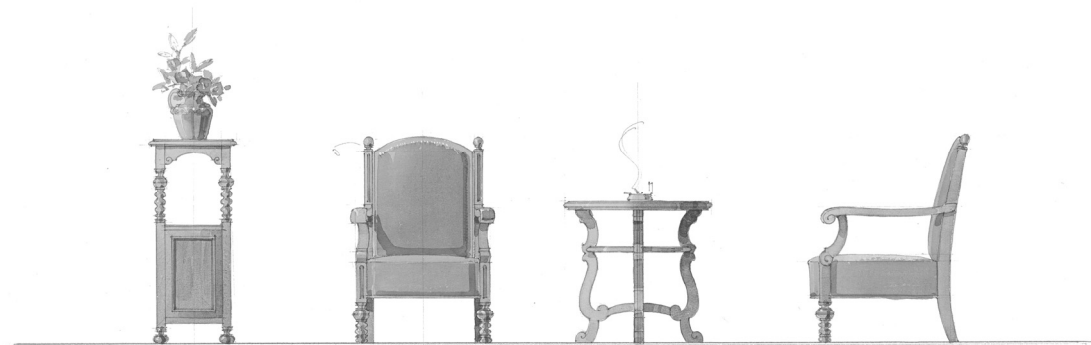
資料館だより

第 73 号
2014.3.1

目 次

芝口御門・芝口橋の不思議…………… 2	なるほどッ！ 考古学（4）縄文時代の土掘り作業… 6
港区名所案内 四之橋・広尾原…………… 3	コーナー展 開け！縄文
鯰絵 災害を乗り越えた笑いの力…………… 4	ー愛媛県黒岩岩陰遺跡に見る縄文文化の形成過程ー
車町の写真館と関東大震災ー館蔵資料よりー…………… 5	…………… 7

『後久洋家具店製作家具図面集』が刊行されます



明治の初頭から昭和の中頃にかけて、新橋を中心に旧芝区は家具の一大生産地として全国的に知られていました。そのうちのひとつである後久洋家具店^{ごきゅうようかぐてん}は、大正の終わりから昭和 20 年代まで新橋五丁目で洋家具製作及び販売業を営んでいました。本書は、後久洋家具店が製作した戦前期の図面約 500 点を収載した図面集です。図面は、ケント紙に鉛筆で縮尺 1/10 で描かれ、水彩で着色されています。家具配置図面などから、住宅の規模が大きかったことがわかりますが、多くはどこの家のものか不明です。

戦後の大量生産が始まるまで、家具といえば、各部屋に合わせたオーダーメイドでした。家具は各住宅に納品されてしまうため、店にとって図面類は作品以上に重要な資料で、各店舗が大切に保管していたと考えられます。しかし、残

念なことに、関東大震災や第二次世界大戦の空襲等で、新橋は壊滅的なダメージを受け、貴重な資料の多くが焼失してしまいました。そのような背景の中で後久洋家具店は奇跡的に空襲を免れ、後久洋家具店で働いていた方によって図面類は戦後永らく保管されていました。これらの貴重な資料は、所有者、店主・後久重太郎氏のご子孫、関係者の方々の仲介を経て港郷土資料館へ寄贈され、合計 3000 点を超える図面類が港区の指定文化財となりました。

カラー270 ページの本書には、家具図面だけでなく、後久重太郎氏の履歴もまとめました。本書を手にとって、戦前期の芝の洋家具を楽しんでいただければと思います。また、掲載図面と同じ、実物家具作品が残っているようでしたら、ご一報いただければ幸いです。

しばぐち ごもん しばぐちばし 芝口御門・芝口橋の不思議

竹村 到
(文化財保護調査員)

芝口御門は、現在の新橋に建設された外郭門がいかくもんの一つです。宝永7年(1710)9月に建設され、享保9年(1724)に火災で焼失し、以後廃止されました。では、芝口御門とそれに付属した芝口橋にまつわる問題について見ていきましょう。

最初は、芝口御門の建設年代の問題です。宝永7年建設とよく説明されますが、一説には元和2年(1616)の建設ともいわれています。

後者の根拠は、「町方書上」(旧幕引継書、国立国会図書館)の「芝田町四丁目」の項にある記載です。そこには、芝口御門が元和2年に札の辻(現 三田三丁目と芝五丁目の境)に造営されたとあるのです。この場合、芝口御門は宝永7年になって、新橋に移設されたと説明されることが多いようです。

しかし、この段階では数寄屋橋御門(現 千代田区有楽町三丁目)や虎御門(現 千代田区霞が関三丁目)なども、まだ建設されていません。芝口御門が元和2年に本当に建設されたかについては、不明といわざるを得ないのが実状です。

宝永7年の芝口御門建設は、六代将軍徳川家宣への新井白石の建言けんげんが契機となります。同年正月に朝鮮通信使つうしんしを迎える際の問題点を聞かれた白石は、「西郭のみいまだ国門あらざる」(『折りたく柴の記』)旨を言上し、その結果芝口御門の建設が決まり、同年9月に完成しました。これが正しいならば、札の辻からの移設とする説には無理があるように感じられます。

次に、宝永7年9月に出された触書ふれがきの文言について見ていきましょう。触書の条文に、芝口御門と芝口橋が登場します。しかし、諸本によって文言に微妙な違いがあり、どれを採るかで大きく意味が変わってしまいます。どういうことか、具体的に見ていきましょう。

芝口橋は、当初は「新橋」と呼ばれていまし

たが、芝口御門建設時に「芝口橋」と改称されます(芝口御門廃止後は、新橋に戻ります)。問題は、この呼称に関わることです。

実際に、条文を掲げて見ましょう(史料は書下し文で引用します)。

【史料1】『御触書寛保集成』2466

一 芝口御門に付き候橋は、芝口橋と申す筈に候あいだ、ただ今までの芝橋、いよいよその通りにて芝橋と申すべき事

内容は、芝口御門に付属する橋は芝口橋と称すべきなので、これまで芝橋と呼んできた橋はそのまま芝橋としなさい、というものです。このことは、当時の人びとが「芝橋」を「芝口橋」と呼んでいた可能性を示唆しています。

【史料2】『江戸町触集成』4284

一 今度の新御門、芝口御門と唱え申すべく候、ならびに橋は芝口橋と申すべき事

これは、非常にシンプルで、今度新設された門を芝口御門とし、(そこに付属する)橋は芝口橋としなさい、という意味になります。

この外に戦前からよく利用された史料集の中に、もう一つ文言の違う条文があります。

【史料3】『日本財政経済史料』9巻

一 芝口御門に付き候橋は、芝口橋と申す筈に候あいだ、ただ今までの芝橋、いよいよその通りにて芝口橋と申すべき事

一見すると【史料1】と同じに見えますが、「芝橋」ではなく「芝口橋」となっています。これでは、「芝橋」を「芝口橋」と改称しなさいという内容になってしまいます。

【史料1】と【史料2】には矛盾はありませんが、【史料3】とは矛盾がでてしまいます。【史料3】は、どこかで写し間違えたのでしょうか？ さてさて、どの条文を信じたら良いのでしょうか？ 皆さんはどのように考えますか？

しのはし 四之橋・広尾原

平田 秀勝
(文化財保護調査員)

港区を流れる河川・古川には、江戸時代より多くの橋が架けられています。現在の南麻布三丁目から白金一・三丁目に架かる四之橋(薬園橋、相模殿橋)は、古川やその近隣に広がる広尾原の景観とともに江戸名所の一つに数えられ、さまざまな錦絵や地誌に取り上げられました。

四之橋という名称は、一之橋から古川上流の方に数えて4番目の橋であることから名づけられました。架けられた年代は詳しくはわかりませんが、寛永19年(1642)11月から同20年9月ごろの江戸の様子を描いたとされる『寛永江戸全図』(大分県臼杵市立臼杵図書館所蔵)によると、すでに南麻布の薬園坂から、白金の三光坂方面へ通じる道が開かれ、橋が架けられていたことがうかがえます。また、別名に薬園橋(御薬園橋)、相模殿橋と唱えたのは、古川の北岸、現在の南麻布三丁目11番～20番あたりに寛永15年から幕府の薬園(麻布御薬園。品川御薬園、目黒御薬園とも)があり、薬園が貞享元年(1684)、小石川に移転した後、常陸土浦藩主土屋相模守の屋敷となったことに由来します。

四之橋のかたわらには、時々、狐が化けて買いくるという噂で評判となった麻布名物「狐しるこ」尾張屋藤兵衛の店がありました。尾張屋藤兵衛の名は、『江戸買物独案内』(文政7年〈1824〉刊)「鰻蒲焼」の項に「麻布さかミどの橋 蒲焼 尾張屋藤兵衛」と見え、尾張屋板切絵図『目黒白金辺図』(嘉永7年〈1854〉刊)には、四之橋の南に「狐鰻」とあることから、麻布名物「狐しるこ」は、鰻蒲焼の名店「狐鰻」で商われていたと思われます。

四之橋の様子を描いた錦絵や地誌などにも見られる古川南岸の野原は、広尾原と呼ばれました。春には土筆が多く生えることから土筆が原(筑紫が原)とも唱え、『絵本江戸土産』には、

江都第一の郊原(野原、原野)にして
人のよく知る所なり

〔中略〕

古への歌に見えたる武蔵野の景色ハこれかと
おもふばかり寂寥として余情深し

とあり、江戸で最もよく知られた野原であったことがうかがえます。また、『江戸名所花暦』によると、古川北岸の光林寺(南麻布四丁目11)境内に彼岸桜の大樹があり、春になると、この桜を見るために身分を問わず、多くの人々が料理や酒を持ち寄って、対岸の広尾原に集まり花見に興じる様子が記されており、秋には、道灌山(現在の荒川区西日暮里四丁目辺り)、牛島(現在の墨田区向島五丁目辺り)とならび評される虫の音の名所としてもあげられています。



麻布古川 相模殿橋 広尾之原(『絵本江戸土産』より)

現在、古川の上には高速道路が走り、武蔵野の原風景を思い起こさせる広尾原も明治以降、住宅や商店街、学校へと姿を変えました。古来より同じ場所に架設されている四之橋の欄干には、橋や近隣の歴史を記した案内がデザインされており、土地の歴史や記憶を今に伝えます。

なまず え

鯰絵

災害を乗り越えた笑いの力

小澤 絵理子

(文化財保護調査員)

鯰絵は、錦絵（多色摺りの浮世絵版画）のジャンルの一種です。大地震に関する情報と、鯰が動くことによって地震が起こるという俗信が結びついたもので、滑稽な内容やパロディが主な画題となっています。安政2年(1855)10月2日に発生した大地震の直後から、約2か月の間に集中して版行されました。その数は現在確認されているだけで200種以上もありますが、ほとんどの作品に作者名や版元の印がありません。江戸時代後期の出版物には届出と許可が義務付けられていたので、正規に版行された錦絵には、必ず、絵師の名前〈落款〉を入れ、名主が検閲した印として〈改印〉が彫られています。当時の法令では、時事的な問題や事件に関する出版が禁止されており、当然、大地震の被害やそれにまつわる社会状況などは、内容的に許可が下りるものではなかったはずですが、震災後の混乱の中、競うように製作されたことがわかります。翌月になると、これらの版本を取り上げて、販売を禁止する通達があり、さらに12月には取り扱った絵草紙問屋が逮捕されるなど厳しい取り締まりが行われたということもあり、このブームは2～3か月ほどで終わりました。

改印が無い場合、残念ながら製作時期を時系列で確認することはできないのですが、情報の提供、悲しみ・怒りの表現、復興・復旧の作業の様子など、短期間のうちにさまざまなバリエーションが生まれたことから、多角的な視点があったことがうかがえ、他の錦絵と同様に、庶民の意識や社会状況を反映するものだと考えられます。

巨大な鯰を懲らしめる構図の作品が多いのですが、鯰が土下座して詫言っていたり、けが人の治療や壊れた建物の修理をして罪滅ぼしを

するなど、鯰を擬人化したものも多く、また、黒船来航と結びつけている作品もあり、世相を批判的に投影した絵もあります。中には、画中に鯰が描かれておらず、財産を失った金持ちや、反対に復興の景気で儲かり、羽振りが良くなった人々を描いたものもありますが、これらもジャンルとしては鯰絵に分類されています。

これらの多様な作品には、驚き、恐怖、悲しみ、絶望、怒り、憤り、不公平感など、さまざまな心の動きが投影されています。そして、多くの作品に共通しているのは、笑いを生み出すユーモアの感覚が読み取れるという点です。

天災によって、尊い命や日常生活を瞬時に奪われ、損壊した街の中に立ち尽くす絶望感や恐怖、やり場のない悲しみや憤りは、いつの世も変わらないはずです。江戸の人々は、巨大鯰を災害の〈犯人〉に仕立て、絵の中というフィクションの空間で成敗することによって、多少は溜飲を下げたのかもしれません。被災による心の痛みを分かち合いながらも、そこに〈笑い〉の要素を織り込んでいたのは、人々がそれを求めていたからに他ならないでしょう。



鯰絵「じしん百万遍」(部分)

大鯰が、大地震を起こして人や町に多大な被害を及ぼしたことを悔いて出家し、地震で儲けた人々とともに百万遍の念仏を唱えている。

(郷土資料館の常設展示では写真パネルを展示しています)

くるまちょう

車町の写真館と関東大震災

—館蔵資料より—

大坪 潤子

(文化財保護調査員)

当館所蔵写真の中に、芝区の車町（現 高輪二丁目）64番地を撮影した2枚（写真1、2）があります。同地にお住まいだった方からご寄贈いただいたものです。この写真、いずれも名刺サイズの小さなものですが、大きな出来事をきっかけに写されました。



写真1（大正12年9月1日撮影）



写真2（大正13年9月1日撮影）

写真1の画面左下に「12・9・1」、すなわち関東大震災発生の日付が焼き付けられています。影が短いので、地震発生後あまり経たない午後の時間帯に撮影されたものでしょう。中央の建物は、2階に「写真」の看板が掛かり1階に写真額を並べたショーウィンドウがあることから、写真館だと判ります。額は傾き、壁やガラス窓の一部が壊れるなどの被害が認められます。その右下、写真館の出入り口脇には、十数人の男女が集まっています。疲れた表情や、話し合う

様子が見られます。彼らの後方にある瓦屋根は、功雲院（通称・鳩寺）のものとみられます。同寺は明治43年(1910)に豊島区へ移転しますが、本堂は戦後まで車町に残っていました。

写真2は、下辺に「13・9・1 震災一周年記念日」とあります。定点観測を意図したのでしょうか、写真1と同じ場所にいる人々は、撮影者に呼ばれて顔を向けた、あるいは気づかずにいるといった風情で表情はにこやかです。

関東大震災では、被害状況を伝える写真が多数撮影され流通しました。その多くは、震災前から名の知られていた繁華街や建造物等の大きな被害や避難の様子、また、犠牲となった人々を被写体としています。これらは、画面への煙の加筆や付された地名に誤りがあるなど必ずしも正確なものばかりではありませんでしたが、当時被災地から離れた場所へ被害状況を伝え、時を隔てた現在の我々にとっても関東大震災のイメージを形成させるものとなっています。

こうした、不特定多数の人々に向けたいわゆる「震災写真」に対し、左の2枚の写真は、日常の延長にある私的な記録写真だったといえます。撮影者は、被写体となった写真館の主だと考えるのが自然ですが、確実なことは判りません。寄贈者は写真2の右側の家で生まれ、写真館の息子と遊び、館からよくタンゴ音楽が流れていたことを覚えているそうです。そして関東大震災では、この付近は倒壊や焼失を免れましたが、初めは寺院、次に市電の敷石の上、さらに火の番小屋が安全と言われて避難したということです。

甚大な被害のなかった場所での記録写真は残されにくく、当時の記憶も失われつつある現在、これらの写真は私的な記録を超えて関東大震災と車町の暮らしを伝えるものになっています。

なるほどッ！ 考古学

（4）縄文時代の土掘り作業

岡本 康則
（埋蔵文化財調査員）

今回は、縄文時代の労働について考えてみましょう。獲物を捕るための^{おとしあな}陥穴掘り、食べ物を^{ちようぞうけつ}入れておく貯蔵穴掘り、家となる^{たてあなじゆうきよ}堅穴住居掘りや土器作りの材料となる粘土の掘り出しなど、縄文時代の人々にとって土掘りは、生活に欠かせない労働でした。縄文時代の人々が土を掘る時は、実は打製石斧の名で知られている石器を使用していました。この石器は、斧という名前がついていることから木を切る道具であると考えられてしまいがちですが、実際は、土掘りの道具として使われていたものなのです。

打製石斧は、長方形に近い形の短冊形、三味線の^{ばち}撥のような撥形、秤に使う分銅のような分銅形と3種類の形があります。形の違いはありますが、このどれもが土掘り具として使われていたと考えられています。その理由として、刃の先端についた細かい傷や磨耗（使用痕）が観察できること、木を切るには刃が鋭利でないことなどがあげられます。それに加え、東京都多摩ニュータウン遺跡群で見つかった、粘土を採るために掘られた穴からは、打製石斧の破片が見つかっており、粘土を掘り出す際に打製石斧が使われていた可能性を高める事例となっています。

打製石斧は、木製の柄の先につけて使われたと考えられています。この柄の形は、畑を耕す鋤のような柄（^{ひざえ}膝柄）と、スコップのようなまっすぐな柄（^{なおえ}直柄）の2つの形が考えられています。しかし、確実に打製石斧をつけたと考えられる柄は、遺跡から見つかっていません。

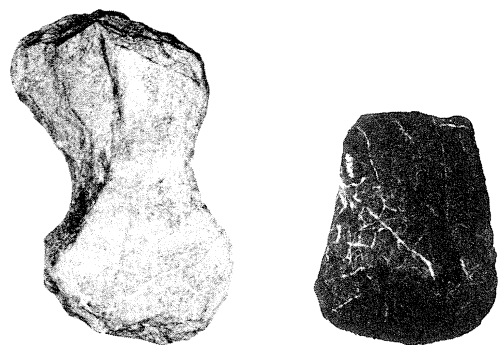
では、縄文時代の人々の掘削動作はどのようなものだったのでしょうか。膝柄につけた打製石斧は、振りかぶって地面に打ち付けた後、そのまま手前に引く動作が考えられ、これは、鋤で畑を耕す動作に近いものです。一方、直柄につけた打製

石斧は、スコップのように地面に突き刺して使ったと考えられます。しかし、スコップは地面に突き刺した後、足を使って地面に押し込みますが、打製石斧には、足をのせる所が無いので、足で押し込むことはできません。これらの動作を考えると、膝柄のほうは、堅穴住居など広い穴を掘る時に、直柄のほうは、狭くて深い穴を掘る時に、役に立っていたのでしょう。

打製石斧を使うと、実際にどの位の時間で穴を掘ることができるものなのか調べてみました。

縄文時代の陥穴の製作時間を調べるため、膝柄につけた打製石斧で土を掘る実験を行った結果では、約 1.8×1.3m の楕円形で、深さが約 0.75m の穴を掘るのに、6.5 時間かかりました。この結果から、縄文時代の一般的な陥穴を1人で1つ作る時間を計算すると、約 14 時間かかります。このような時間がかかった理由として、打製石斧が土に深く刺さらないこと、幅が 10cm 以下と狭いため、現代の鋤やスコップのように、打製石斧に土をのせて掻き出す事ができないことがあげられます。

このように縄文時代の生活に深くかかわっていた打製石斧。さわれる展示室では、分銅形の打製石斧を展示してあります。実際に手にとり、縄文時代の労働作業風景を想像してみたいかたがでしょうか。



伊皿子貝塚出土打製石斧 分銅形(左)、撥形(右)

開け！縄文

—愛媛県上黒岩岩陰遺跡に見る縄文文化の形成過程—

安藤 広道

(慶應義塾大学教授)

民族学考古学専攻の学生たちによる大学所蔵資料展も、今回で3回目を迎えました。今年は、昨年の東北から大きく場所を変え、愛媛県久万高原町の上黒岩岩陰遺跡を取り上げました。

上黒岩岩陰遺跡は、1961年に発見され、その後1962年から1970年まで、4回にわたり慶應義塾大学が中心になって発掘した遺跡です。一連の発掘によって、縄文時代初頭の土器や石器、女性を描いた石偶をはじめ、縄文時代前葉の豊富な土器、石器、骨角器、埋葬人骨や日本列島最古の埋葬犬骨など、数々の重要な発見がありました。その結果、遺跡は1971年に国史跡に指定され、西日本を代表する縄文時代遺跡のひとつとして広く知られるようになったのです。

このように、上黒岩岩陰遺跡はとても有名な遺跡なのですが、それでも調査は50年も昔のことです。その成果を、何故今取り上げたのかというと、理由はふたつありました。

ひとつは、2008年に遺跡の発掘報告書が刊行されたことです。これによって、これまで部分的な公開に留まっていた調査成果を、全体的に利用できるようになりました。もうひとつは、一昨年、我々の研究室を中心に埋葬犬骨の分析を行い、研究成果を発表したことです。実は、埋葬犬骨は長らく発掘されたままで保管されていました。それを、さまざまな角度から分析したところ、改めて日本列島最古の埋葬犬骨であることが確認されるとともに、当時の犬に関わる多くの成果が得られたのです。上黒岩岩陰遺跡は、こうした近年の調査研究によって、今まさに再注目されているのです。

上黒岩岩陰遺跡は、縄文文化の諸特徴が形成されていった、縄文時代の初頭～前葉の遺跡です。このころは、地球規模の急激な気候変動があった時期でもありました。そこで、展示では、

出土遺物を紹介しつつ、気候変動に伴う環境変化のなかで、世界最古の土器のひとつである縄文土器や、土偶につながる女性像、弓矢による狩猟技術、狩猟のパートナーとしての犬の飼養といった、縄文文化の諸特徴が、どんなふうに形成されたのかを示すことに主眼を置きました。

展示にあたっては、今回も大学院生の指導のもと、学部生たちがよく調べ、展示にさまざまな工夫を凝らしてくれました。また、今回は、初めてタッチパネルモニターによる解説を導入しています。そこでは、埋葬犬骨の分析結果を調べることができるほか、犬の頭蓋骨を、360度どの角度から見られるようにしました。

手前味噌かもしれませんが、これまでの3回の展示は、見に来てくださった皆さんから概ね高い評価を得てきたと思っています。我々の研究室としても、この企画のように、研究室に眠っている資料や研究成果を公開でき、学内とはまた違った教育活動を実施できる機会は、たいへん貴重です。3年目を迎え、展示から卒業論文のテーマを見つける学生も出てきました。

今後も、こうしたウィンウィンの関係にある博物館と大学の連携を是非継続していきたいと思っています。



事業予定 (平成 26 年 3 月～)

コーナー展

・「平成 25 年度指定文化財展」

開催中～3 月 19 日 (水)

・「平成 25 年度新収蔵資料展」

4 月 18 日 (金) ～6 月 18 日 (水)

・「宇田川家文書展」

7 月 18 日 (金) ～10 月 11 日 (土)

高輪に住み肥後熊本藩細川家の御用達商人を勤めていた宇田川家の寄贈文書を広く紹介するとともに、御用達商人と大名との関係や商業活動、生活などの一端を垣間見ます。

講座など

・親子学習会「日本庭園にふれてミニミニ石庭 (枯山水) を作ってみよう！」

3 月 8 日 (土)・22 日 (土)

旧芝離宮庭園の見学と枯山水の箱庭作りをおこないます。

事業の詳細は『広報みなと』や郷土資料館ホームページをご覧ください。

刊行物案内

『幕末・明治期古写真集』

館蔵の古写真の内 169 点を考察と共に収載しています。平成 25 年度の特別展はこれらを中心に幕末の人物写真などを加えて構成しました。

(頒布価格 1500 円)

【平成 26 年 3 月末刊行予定】

『研究紀要 16』

館蔵の「増上寺火之御番被迎合覚書」の翻刻、青山界限の先史文化に関わる論考などを収載します。

(頒布価格未定)

『後久洋家具店製作家具図面集』

新橋にあった洋家具店が製作した、戦前の貴重な家具図面約 500 点をカラーで収載します。

(頒布価格未定)

- ・このほか、『増補港区近代沿革図集』『写された港区』など、各種刊行物があります。郷土資料館ホームページに一覧を掲載し、販売は展示室横の事務室、または郵送にておこなっています。

事業報告 (平成 25 年 10 月～平成 26 年 2 月)

- ① コーナー展「新収蔵資料展」 (7 月 1 日) ～10 月 12 日
- ② 資料館講座「港区立港郷土資料館所蔵 幕末・明治期古写真」
(全 3 回) 11 月 2・8・22 日
- ③ 土曜体験教室「古代のアクセサリを作ろう！」
12 月 14 日・平成 26 年 2 月 22 日
- ④ コーナー展「慶應義塾大学所蔵考古資料展 開け！縄文
-愛媛県上黒岩岩陰遺跡に見る縄文文化の形成過程-」
平成 26 年 1 月 6 日 ～ 2 月 19 日
- ⑤ 資料館講座「銅像になった人物とその時代 -芝公園界限-」
平成 26 年 2 月 14・21 日 (・3 月 1 日)

特別展「幕末・明治期古写真展」 を開催しました。

平成 25 年 10 月 25 日 (金) から 12 月 15 日 (日) まで、特別展「港区立港郷土資料館所蔵幕末・明治期古写真展～名所・旧跡、そして人々～」を開催しました。

増上寺や新橋停車場、上野公園など港区内外の往時の景観や、人々の暮らし、幕末の遣欧使節団の面々などの古写真をじっくりとご覧になる来場者で賑わいました。

港区立港郷土資料館の利用案内

交通 JR「田町」駅下車徒歩 5 分、都営地下鉄「三田」駅下車 (A3 出口) 徒歩 2 分
都営バス「田町駅前」停留所下車徒歩 2 分、港区コミュニティバス(ちいばす)
「田町駅前」停留所下車徒歩 2 分、「田町駅西口」停留所下車徒歩 3 分

開館時間 9:00～17:00

休館日 日曜日・祝日・第 3 木曜日
年末年始・特別整理期間
(臨時休館などは HP などで随時お知らせします)

入館料 無料



『資料館だより』第 73 号
平成 26 年 (2014) 3 月 1 日発行
編集・発行 港区立港郷土資料館
〒108-0014
東京都港区芝 5-28-4
Tel. 03-3452-4966
Fax. 03-5476-6369
<http://www.lib.city.minato.tokyo.jp/muse/>

刊行物発行番号 25105-7541